

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎)

## 遠い麻山への道

北海道 納 富 善 蔵

(旧吉岡)

昭和十二年二月、私が十歳のとき、両親に伴われ満州に渡り哈達河開拓団として入植した。六畳間に親子六人、学校といえは教室が一ツ、そのうちにレンガの学校と寄宿舎ができあがって周りに二千本くらい植樹をさせられた。

午前中は授業午後は植樹と草取り、全校生徒四十人ぐらい、炊事当番は四年以上二人組で朝四時から起きて準備をした。ほかの生徒は家畜の世話や野菜の手入れ、薪割りなどいろいろな仕事を分担して働いた。高等科一年の時、母を亡くし家事は父が担当、兄十七歳が畑仕事、実によく働いたものだ。

昭和十八年三月高等科を卒業し団本部の配給所に勤め週に一日青年学校に通い軍事訓練を受けた。

昭和二十年三月、一家の柱であった兄が召集されたのをはじめとして各団に次々と召集が来て八月ごろまでに七割が召集され各団ともに労働力がなくなった。

哈達河開拓団はこの年入植十周年の記念祭を行う予定であった。

八月九日、団長名で青校生に、集合命令がきた。晴れ渡った青空、平陽鎮方面の上空では飛行機が数機乱舞している。関東軍の演習でもしているのではないかと思っていた。

実はこれがソ連機の爆撃であった。私が団に着いた時はソ連参戦の報が入っていて団長を中心に団幹部が協議中であった。

我々青校生は団の警備と各部落への連絡であった。夕方になり県庁より開拓団家族全員鶏寧まで一時引揚げようにとの指令に再度幹部が協議、全員県庁に引揚げを決定し、青校生は二人組となって各部落へ命令書を持参して連絡に走った。

我々が帰団したのは夜であった。団の協議はなお続  
いていて次のようなものであった。

- 一、学校の寄宿生は無事親元に戻す
- 二、団本部倉庫の食料の扱いについて
- 三、重要書類の始末方法について
- 四、武器の取りまとめ、始末について
- 五、現地人の今後の問題について

その他次々と問題はある、夜九時ごろ中国人部落の  
屯長を集め、我々はソ連軍と戦うため鶏寧に集合する。  
戦いは短期間に終わるものと思う。その後再び哈達河  
に戻る。それまでは後を頼む。団の倉庫内の食糧や飼  
料は皆で仲良く利用して良い。以上のような指示をし  
た。

私たちは警備以外の者は書類の焼却、武器の始末、  
団本部の荷物の整理など目の回る忙しさであった。夜  
半に入り現地人の動きが不穏になって来た。翌十日九  
時ごろ東海駅近くの阿部鉄工場付近が空襲を受けた。  
団本部も引揚げを急ぎ入植以来十年、無言のまま何回  
も後を振り返り別れを惜しんだ。この地とこれが最後

とはだれ一人として思わなかった。

母もこの地に眠っている。後ろ髪を引かれる思いで  
あった。哈達崗で先頭隊と後尾隊が合流した。そのこ  
ろよりソ連機の空襲が激しくなった。東安方面で交戦  
し血まみれになった兵士がトラックで運ばれて行く。  
団員や馬なども被害を受けたため高粱畑に一時避難し  
た。

空襲を避けるため夜間行動をすることにした鶏寧集  
結は危険だとの情報に林口を目指して進んだ。その夜  
は月あかりもなく真暗闇で前の馬車を見失ったら迷い  
そうであった。夜半より雨となり、翌十一日は終日雨  
の中を行動した。明けて十二日昨夜の雨はからりと晴  
れたが道路は泥んこ道である。出発以来の強行軍で人  
も馬もくたくたに疲れきっていたが黙々と歩くのみ。  
兵隊の動きが活発になり事態の急変が察しられた。  
話によると前方には反乱軍が後方からはソ連の戦車  
部隊が迫ってくるとのことであった。

団も行動を一時中止して事態を見守った。関東軍の  
前進、後退は簡単であるが、多くの家族を引率してい

る団の行動は簡単には行かない。軍の保護を依頼するより道はないと団長は通りかかった兵隊に頼んでみたが一向に聞き入れてくれない。

団長は私を呼び後方の敵状偵察と再度関東軍への保護依頼のため伝令を命じた。馬二頭を選び白たすきを掛けて、ぬかる道を十キロほど飛ばした。

山中に日本軍が待機しているのを見つけて「哈達河開拓団ですが、団長の命令でお願いにきました。安全地帯まで護送をお願いできないでしょうか」と、再三、再四お願いするも一向に聞き入れてもらえない。

しばらくして隊長らしき人が出て来て、「我々の任務は開拓団の保護ではない。気の毒だがそのように伝えてくれ」と言う。

ある兵隊の如きは、スパイ呼ばわりして、銃殺寸前までいった。二頭の馬も一頭は倒れ肩にかけた白たすきも泥にまみれて団に帰りついた。待っていた団長にありのまま報告した、団長も沈痛な面持ちで、「後方から戦車が迫ってくる、軍の保護も期待できない。前方の状況は私が見て来る、君たちもついて来い。」と

言われ二、三人の青校生があとに従った。

小高い丘に登り前方を見ると、敵の姿は見えないが銃声が激しく砲煙と砂煙りで、戦闘状態にあることを判断した。

さすがの団長も無言のまま丘を下り始めた。団長は何を考えていたのだろうか、その時すでに死を覚悟したのではなからうか。

待ちかねていた団員や家族を集め、事態を説明し、皆さんの今後の行動について、協議したい。遠慮なく意見を申し述べてもらいたい。団長の腹は決まっていた。

誰かが自決だ！と叫んだ。全員沖繩にならって自決しよう！と！方方から伝わって来た。

団長は「敵に辱めを受けるより、日本人らしく潔く死ぬことにします。

皆さん異議はありませんか！」だれ一人として声もない。団長は私を呼び、「青校生は、全員の自決が終わるまで、敵の攻撃を受けないよう警備せよ」と命令した。指導員は南郷開拓団の桜井さん、青校生は七人で

あった。

私たちが出発するころは、重要書類の焼却などが始まっていた。山一ツ隔てて警備に向かった出発間もなぐ銃声が鳴り始めた。

どのくらい時間がたったか覚えていないが銃声がなくなつたので一同声なく、自決現場に戻る、近づくにつれて血生ぐさいのと火薬の臭いが鼻をつく。麻山の丘、一番高いところに貝沼団長、次に一家族ずつかたまっていた。

三十数年振りで会った、久保君の話では、自決前に水を汲みかわし別れの水盃をし、愛児には持ち合わせの晴着を着せ、最後の抱擁をして、全員で東方を遥拝して、貝沼団長の倒れるのを合図に自決（銃殺）が始まったという、貝沼団長以下団員、家族全員の死に場所が麻山の丘とはだれが想像したでしょうか！

今思い出してもかわいそうでならない。

我々青校生も皆の後を追うべきか、それともこの様子を一人でも生き残って祖国日本へ帰り報告すべきか！短時間ではあったが相談した。その結果我々は若

いのだ万難を排して祖国に帰り報告すべきだとの結論に達した。

行けるところまで行こうと誓った。山を下り始めるころは夕暮れとなっていた。高粱畑の中に後尾隊が集結しているのを発覚し、我々もその一団に加わった。福地医師を中心に協議が始まっていた。

その夜林口に向かって出発、私たち青校生が先頭になり団員家族がそれに続いた。その夜は真暗闇であったが、死んだ貝沼団長が幻となって一晩中道案内をして下さったのです。

先頭を歩く団長の後を追って夜明けまで歩き通し無事に大きな道路に出た。

朝になって見ると青校生だけであった。私たちは茫然としてしばらく道端に座り込んだ。いかんともできず、小高い山に登って見渡したが人影も見えず、朝霧と砲煙が立ち込めて遠くは望めなかった。地名も方角も全く不明、後方との連絡も取れぬまま、兵隊の後に歩いて歩き始めた。林口にも入れないという情報に牡丹江を目標にして歩き続けた、途中哈達河開拓団の柳

原さんの奥さん親子に会い、大きなお腹をして背中に小さい子を、片手には歩ける子供の手を引き、片手には荷物を持って炎天下の道を歩いておられ、その姿を見て通り過ぎる訳にもいかず、子供を交替で背負い半日はど一緒に歩いた。気の毒に思った奥さんは子供とゆっくり歩きますからと何回も言われるので別れた。

又、翌日団の副団長であった上野さんにも会い小さい娘を連れていたので、又交代で背負って半日ぐらいた歩いた。上野さんは足を痛めており歩行も困難であった。先頭隊で強行突破したとき家族と別れ別れになったと言う。

やはり気の毒だから先に行ってくれと、言うので別行動となった。後日奥さんとも出会われ現在熊本県で夫婦共健在である。

二道河子か、三道河子の駅かはつきり覚えていないが哈達河の宮下、待井さんに会い、今後二人を加え七人で行動することとなった。

牡丹江もソ連の支配下にあり新京に向かった。ある時はソ連軍の陣中を月夜の晩に突破したり、中国人の

部落に大胆にも泊まり込んだり、今思い出してもゾーとする、中国人部落に泊まることも危険になり、野宿のみとなる。

ある時ソ連兵がこちらに向かって来たのでヨモギ草の中に隠れ蚊に食われるの我慢をして通り過ぎるのを待ったりして、生きた心地がしなかった。

途中山の中で兵隊の一個班と合流し行動を共にすることになった。その中に馬場兵長という人がいて第一次弥生開拓団の人だという、私たちは日がたつにつれて体はやせ体力はなくなり、帯革で腰のあたりがすれて赤くなり弾薬が重くてどうにもならず十発捨て、二十発捨て最後に銃も捨て、自決用の手榴弾一発だけ腰に下げ南京袋で作ったリュックを背負って歩いた。

天気の良い日はまだしも雨降りの夜などは泣きたいくらいだ。雨でびしょ濡れになり泊まる家もなく、火を焚くにも火はつかず、大木の下で夜を明かすことも幾度か、野宿の準備をしたところ昨夜の場所の近くであった。

一日中同じ山をぐるぐる回っていたのです。太陽を

目当てに行動しているのが曇っていれば見当がつかず、羅針盤のない船のようなものであった。前途に不安を感じた。このままのたれ死にするのではないかとさえ思えた。何日歩いたのかも忘れかけ、野宿の時ヨモギを折って体にかけて夜露をしのいだところ朝には霜が降りて白くなっていた。

我々の不安はますます募るのみ、食料のトウキビは固くなってくるし、野草もなくなってくる。ある日山の中の一軒家を見つけ、回りの菜豆を煮て食べようとした時、土民軍の襲撃を受け、私たちは何も持たず山の中に逃げ込んだ。馬場兵長は我々の忘れ物を持って来てくれた。実に落ち着いた人であった。

この時馬場兵長は我々に、君たちと行動を共にしていれば、自分たちの命も危い。今日から別行動をとると言われ兵隊は先に出発した。私たちは親に見放された子供の心境であった。我々は失望のどん底に落ち、しばし山中で無言のまま寝そべっていた。

遠くの方でかなりの銃声が聞えた。後で聞いた話では、別れた兵隊が山河屯の市街近くで交戦し犠牲者も

出たという、もし我々も同行していたらと思ひ、ホッとした。

間もなく一人の中国人が近付き、この近くに日本人の開拓団があるという。案内を頼み、明るいうちは危険だからと暗くなってから近くまで案内してくれて中国人は逃げてしまった。様子を伺っていたところ話し声で日本人とわかったので思い切って行ったところ、そこは上金馬開拓団だった。水田専門の開拓団で部落は土民に襲撃され団本部に集結しているとのことであった。

梶谷団長にあいさつしてお世話になることになった。哈達河を出てから食事らしいものもとっていなかったのに、白いご飯と味噌汁、幾日振りだろうか。この味は一生忘れることはないだろう。それに屋根の下で寝ることができる。兵隊と別れなかったら今夜も野宿したであろう。様々なことが頭をよぎりいつまでも眠れなかった。その後、下金馬開拓団に移動した。

下金馬の藤村団長は一度、私たちの哈達河開拓団を視察に来て貝沼団長のことも良く知っていて麻山の件

を話したところ大変残念がって、毎月十二日の法要に協力して下さった。

この団は水田専門で治安の治まった秋に稲刈りをして食糧を確保したが、公安隊や八路軍が代わるがわる来ては米を提出させられた。

終戦後の満州で白米のご飯を食べ、暖かいオンドルの家に寝て、亡くなった人たちには申し訳ないような気がした。

翌年八月引揚げ命令がくるまで、八路軍の使役、中国人の日雇い、水田の耕作にと精を出した。馬は八路軍に徴収されて一頭もないのでプラオに長いロープをつけ皆で引っ張り耕作をしたものです。

八月の引揚げ命令が来たころには稲穂が頭を下げていた、私は荷物は何もないのでお世話になった人たちの荷物を持ってあげた。

汽車は無蓋車で止まったらいつ発車するのかわからない。乗務員に心づけをしなければ途中で止まったりだ。吉林・新京・奉天とコロ島に着いたころは寒い季節になっていた。私はコロ島で引揚げ船に食糧を積み

込む使役に出て二十一年の最終船で佐賀県の叔父の家に引揚げた。満州で召集された兄が先に帰っていて何よりうれしく心強かった。一冬手伝っていたがいつまで世話になってもいられず、兄と相談して当時募集をしていた、北海道開拓に応募して二十二年三月現在の厚真町に入植したが条件が悪くて転地を考えている時、私たち入植の世話をした下さった同じ佐賀県出身の納富さんの家には男の子がいないので私は養子となり兄は九州へ帰った。

納富家は土地約三十町歩、馬一頭、乳牛二頭で農耕地としては二町歩ほどしか開墾されておらず荒地開墾から始まった。将来の夢であった酪農経営を目指して真剣に頑張った。

当時は食糧も思う様になく、ソバ、馬鈴薯が主で牛乳は水がわりに飲んで真っ黒になって働いた。四十年代に入り、我が酪農経営も軌道に乗り始めた。

四十四年五月、一通の手紙が来た、元哈達河開拓団の笛田道雄さんからであった。

突然で驚いていると思いますが哈達河の生存者の集

いを去る三月三十日埼玉県の相川氏宅で催し、その時静岡の小笠原氏より貴殿の話が出て哈達河会に入会し会の運営に協力願いたいという文通が始まり、志半ばで麻山の野に倒れた同胞たちの冥福を祈ると同時に、遺骨収集を何んとか実現させようと運動が始まった。

一代目哈達河会長の笛田さんは病に倒れ、小林さんから大平さんに引継がれ、昭和五十七年中国国際旅行社、日本側関西旅行社を通じて中国側から八月訪中の許可がありました。

### 第一次訪中

八月十二日の命日に合わせて九日成田空港を出発、鶏塚（西）市人民政府を表敬訪問し通行禁止されて行くことが出来なかったが麻山の生き残った黒川猛夫君や馬場周子さんも顔を見せ元の哈達河開拓団までは案内して頂いたが、麻山の自決現場にはついでに行くことができなかった。近くまで行って残念でならなかった。

### 第二次訪中

翌五十八年札幌市定山溪温泉ホテルで哈達河総会並びに慰霊祭を行った折、東京放送局から取材を申し込

まれ、又第二次墓参の九月一日にも放送局五人が随行した。

九月四日正午、鶏西市着、市長を表敬訪問し、訪中目的の一つに麻山墓参、二つに哈達河訪問、三つに麻山、青龍、両部落を訪問し終戦時大変ご迷惑をかけたことを謝し、又日本人孤児の養育に対しお礼を申し上げたい。四つに残留孤児との面会を許可ねがいたいこと、四点をお願いした。

市長は皆様の訪中を歓迎いたします。皆様方のご要望に対し出来る限りの協力をいたしますとのごあいさつをいただき、又、記念写真を撮ったり、晩は市長招待の晩餐会が催され市の配慮に感謝した。

九月五日哈達河訪問、旧宿舎のみが残り現在学校として使われていた。当時私達が植えた榆の木は大きくなっており懐かしく幹を抱きしめた。夜は昨夜の返礼で市長始め関係者を招待し、晩餐会を開き両国の歌も飛び出し友好を深めることができた。

九月六日麻山墓参は快晴、二時間三十分で麻山に着く、時速六十キロとして百五十キロ、あの時、雨のぬ



かるみを四十時間歩いたのだ（参考：札幌から旭川まで約百四十キロである）女子供ばかりよくも歩いたものと思う。

途中、滴道の街に入った時、バスの中で、日本人も多くの犠牲者がでてゐるが、中国人も、日本人の手によって多くの死亡者が出てゐる。この悲劇を後世に永く伝えるために、炭磁博物館ができてゐる、と知らされ、予想もしなかつた話に一同啞然とした。

私は即座にその博物館の犠牲者の霊にお参りしたいことを申し入れ、その結果午後から案内してくれることとなった。

やがて麻山の自決現場に到着すると、中国側より写真家はバスの中から、外での撮影は一切禁止、バスを降りる時はカメラを持参してはならない。お参りの時間は三十分、ローソク、線香に火をつけてはいけな、と注意を受ける。三十八年間の思い出をこめて、心ゆくまでお参りをおもつていたが致し方ない。私は中国側の注意を守るように伝えてバスを降りる。三十八年前の様子が変わり灌木が繁り一見普通の山と変わらな

いが、草をかき分け土を手で掘っただけで白骨が出てくる。何んと哀れなことか。みんな声を出して泣いた現場をさまよひ、中国側に見られないように持参した白布を敷き心ばかりの供物を供え、日本酒や日本の水をそそぎ合掌した。

現場には青龍、麻山、両部落の代表の方が来ておられ、当時ご迷惑をかけたことに対しておわびをした。又、残留孤児の養育についても厚く感謝を申し上げたのでした。

短時間で充分なことは何一つできなかったが麻山の仏も理解してくれたと思います。午後から滴道の炭磁博物館に案内され、当時の悲惨な状況の説明に一同身の縮む思いがした。慌ただししい日程であったが、当初の目的をほぼ達成し、又、予定外の行事も無事消化し夜行列車で鶏西を後にして、九月八日無事成田空港に帰着した。

### 第三次訪中

三十八年もの長い間、野ざらしの遺骨をテレビで見、又第二次訪中記録を拜見したと、日中平和友好会の長

野広生先生から一月十日付の手紙で遺骨収集についての提言を寄せられました。

一、遺骨収集は国家、政府の責任です。

二、担当官庁は厚生省であるが相手の中国（黒旧江省）など手続きについて記されており日中友好会の事務局長、金丸千尋氏を紹介されました。

金丸事務局長のご尽力により、遺骨収集は日中友好に役立たせたいので報道関係者の同行を歓迎する。テレビについては中国側が撮影してビデオテープを日本側に渡してもよいなど中国側の大筋の回答を伝えてきた。

こうして昭和五十九年十月十二日成田出発で第三次訪中遺骨収集団が決定した。

訪中希望遺族二十五人、新聞記者三人、旅行社専従員一人、金丸事務局長一人、計三十人。

訪中を前に鶏西市政府に対し次の要望書を提出した。

一、自決現場三か所を訪れ現地の確認をさせて頂きたい。

二、麻山の遺骨の一部を旧哈達河開拓団共同墓地の

一角に埋葬させていただきたい。

三、残留孤児との面会、面会希望者の名簿を添え面会日時を市政府に於て決めて頂き、その旨市政府より孤児の方へ連絡ねがいたい。

四、哈達河、訪問時に、各人思い出の地、部落を訪問したいので、出来得れば大型バス以外にジープ三台の用意を願いたい。

四項目をお願いした。

十月十二日、金丸事務局長は一足先に出発、一行二十九人が上海經由北京に向かった。

十三日ハルビン空港、十四日早朝牡丹江駅着市政府の要人多数の出迎えを受ける。夜は市政府の歓迎の宴に全員出席、第一次、第二次訪中のお礼を申し上げる。

十五日滴道煤磁展覽館で中国人犠牲者へ花輪を捧げ冥福を祈る。いったん戻り、午後より麻山へ向かう、道中三十九年前の避難行が目に見えかぶ。バスはあらかじめ要望しておいた、自決現場三か所のうち、先頭集団場所まで停車し香を捧げお祈りをした。

次に中央集団自決現場へ、貝沼団長以下多くの人が

亡くなった現場に立ち三十九年前の惨状を思い出し涙した。

貝沼团长お迎えに來ましたと手を合わせると「オ、吉岡か。よく來てくれた」と貝沼团长の聲が聞こえて來る。

遺骨の一片でもと全員で手さぐるも見当たらず、团长の自決場所と思われる所に、持參の日本酒、故郷の水、供物を供えしほし合掌する。続いて後尾集団の場所へ、この三か所ともに既に中国当局の手で集骨しており、それを受け取り棺に納め、供物を供え木村辰二さんの読経で慰靈祭が始まる。

麻山の靈も、私達生存者もこの慰靈祭をどれほど待ち望んでいたことか、泣くまいとしても胸がつまり追悼の辞は涙声であった。

### 追悼の辞

思えば三十九年前八月十二日夕刻この地麻山において、悲壯な最後を遂げられた貝沼团长以下、四百六十余人の靈に対し謹んで哀悼の辞を申し上げます。皆様方はこの日の來るのをどれほどお待ちになったことで

しょう。第二の故郷哈達河を後にして、三日間の想像を絶する避難行の末、進退極まり、自らの命を断ち、帰らぬ人となられたのです。今日までの三十九年間、酷寒、酷暑に耐え、香を捧げる人として、皆様方を慰めてくれたのは、小鳥のさえずり、そして四季に咲く野の花のみ、寂しさに耐えひたすら私たちの迎えを待っておられたことでしょう。そのことを思うとき、生ある私たちは切なく胸を引き締められます。どうかこれからは中国大陸の土に帰り安らかにお眠り下さい。幸いにもこの度中国側、中国対外友好協会黒竜江省分会、日本側、日中平和友好協会の特別の配慮により、遺骨収集が実現出来ました。

両会に対し深く感謝申し上げます。これから私たちは過去の行為を反省し、日中友好と、両国永遠の平和確立のために努力致すことを、皆様の靈前で固くお誓い申し上げます。最後に近藤あつ子先生の詩を朗読致し追悼の言葉といたします。

願わくば麻山の夕陽よ心あらば、明るく照らせあ

の世への道

十月十五日、訪中団秘書長納富善藏慰霊祭を無事済ませ全員放心状態で招待所に入り、その夜は一室に集まりささやかなお通夜を行う。

十月十六日、朝八時三十分全員バスにて鶏西市火葬場に向かう。火葬を済まし場内で売っている骨箱二つを買い、哈達河共同墓地用と、方正分とに分け保管室に預け招待所に帰る。午後はあらかじめ市政府に要望してあった、残留孤児との面会、今回は自由に話が出来た。来夕食も共にし、和やかな一時を過ごすことが出来た。

十月十七日、鶏西滞在最終日、今日のスケジュールが過密なため、朝食を六時にすまし、早々にバスで出発、最初に哈達河開拓団旧共同墓地の山へ行き、見晴しの良い山頂付近に埋葬させて頂き小雪の舞う中でお参りをしたあと東海農場本部へ、昨年のお礼と、今回のご好意のお礼を申し上げる。その後準備していただいたジープにて、各自元住んでいた部落を訪れた。

短時間で駆け足の旧部落訪問であったが、旧知の人と巡り会うことができたり、旧我が家を見ることが出来て楽しい一時を過ごした。その夜はお世話になった市

政府の方、要人の皆様を招待し、答礼の宴を催した。夜行列車にて遺骨を胸にハルビンへ向かう。駅頭には市政府の方が多数見送りに来て下さった。本当にお世話になりました。

十月十八日、午前十一時四十分ハルビン駅着、遺骨を抱いて降りたつ私たち一行の様子を見た中国の方々とは異様な感じがしたことでしょう。大鵝飯店に落ち着き、役員のみでハルビン外事弁公室に孫志堅先生を表敬訪問し御礼を申し上げます。その夜、孫先生がホテルにお出になり、なにか中国に要望はありませんかと問われたので、実は、私の恩師高田先生（七十九歳）が終戦時避難途中、北安の克山に置き去りにして来られたお母さんを偲び、先生健在中、一度その地を訪ねたいと申して居られるのですが、何んとか行かしてもらえないでしょうか、とお願い申し上げた。高田先生の手紙をあらかじめ金丸さんにお見せしておいたので、補足説明をしていただく、孫先生はしばらく考えておられ、高田先生はお年の様ですが、だれかついて来られますか、と問われたので、即座に私がついて行きま

すと申し上げると、あなたがついてこられるのでしたらよろしい、是非来て下さい、北安回りでも、チチハル回りでも都合の良い様にとのこと、ハルビンまで来られれば、要人をつけて上げましょうと有り難い言葉をいただき、私は一刻も早く高田先生にお伝えしたいと申しますと、孫先生もうなずかれ高田先生が喜んで下されば、私もうれいしと申され、十時過ぎに席を立たれた。

十月十九日、七時四十分最後の訪問地、方正へ向かう。どんよりとした空模様で、今にも雪が降り出しそう、バスはヒーターがきかず寒かった。約四時間余を要し無事方正に到着、ひとまず方正県政府招待所に落ちつき、昼食の後日本人公墓に向かう、そのころより雪が降り始めた。お願いしておいた花輪一对を持参し、バスで二十分の所に日本人公墓があった。静かな原野の一角で、常緑樹に囲まれた墓地は、きれいに整備されていた。従来の日本人公墓に同等大の麻山地区日本人公墓が建立されていた。改めて中国当局の御好意に一同目頭を熱くした。両公墓に花輪を捧げ最後の

慰霊祭を行う。そのころより雪は風を呼び吹雪となり、その雪の中で七十三歳の御高齢ながら、一心に阿弥陀経を声高々と奉ずる、元東海警察隊長本村辰二さんの姿は正に神仙の姿そのものであった。訪中団員一同も、一心に祈った。三十九年間野晒しにしていた霊に謝し、安らかに眠り下さいと、最後の追悼の辞を読み上げる。

哈達河多年の念願であった麻山の遺骨収集を三度の訪中で実現出来、先輩団員の血の出るような遺骨収集運動を引き継ぎ、麻山集団自決を祖国日本に報告すべく、生きて帰り集骨、納骨を済まし、責任を終え、現在哈達河协会会长として働かしていただいております。哈達河と言えば麻山、麻山と言えば哈達河、私と哈達河は一生涯離れることはないでしょう。

#### 【執筆者の横顔】

吉岡善蔵氏は、昭和三年生まれの佐賀県の人。昭和十二年二月、十歳のとき家族全員が満州国東安省鶏寧県哈達河開拓団として入植した。十六年九月高等科一

年のとき母を亡くし、二十年三月一家の支柱として働いていた兄が召集され、次いで団の七割近くが召集を受け労働力は激減した。

昭和二十年八月、青年学校生徒に団長から集合がかりソ連参戦を知った。二人一組となり、各部落に鶏寧県庁まで避難する命令書をもって走った。各部落とも、あまりな急報に大騒ぎとなった。

ソ連機の空襲で鶏寧集結は危険との情報に、林口を目指すより道がない。団は先頭集団、中央集団、後尾集団と三集団に分かれて行動した。中央集団は貝沼団長以下四百余人、当時十八歳前後の、吉岡氏ら青年訓練生数人は団長の目となり耳となって伝令や斥候となって活躍した。退却してくる関東軍の兵隊からの情報では、前方からは中国反乱軍、後方の国境からはソ連の戦車隊が迫って来るという。婦女子連れの開拓団の行動は不可能であることを判断した貝沼団長は、その時既に死を覚悟したのではなかるうか！

生きて引揚げたものの、一家全滅のごとき佐賀の故郷は、感慨無量であったに違いない。

その頃、国の方針として北海道開拓をすすめていたので、佐賀県から七人とともに、北海道勇払に入植。広漠たる満州に似ているので、心機一転開拓にいそんでいた。

その後、納富家の家族から迎えられ、吉岡から納富善蔵となる。その時、二十八歳だった。

営農は現に機械化農業であるし、善蔵氏は地方の企業家から囑望され、現に建設会社の総務部長の重職に就任し、誠意をもって勤務する態度は会社からだけでなく、社会からも広く信望をあつめている。

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎)

## 赤い夕陽

北海道 富樫 昭 治

襲撃を受けて

その朝(昭和二十年八月十二日)私たちの第十次揚